



日本フンボルト協会関西支部 学術企画

コロキウム

踊る身体デザイン

——ダンス研究からみるポスト・バウハウスの100年

とき 2019年2月24日(日) 15:15 ~ 17:45
ところ 京都工芸繊維大学 60周年記念館2F 大セミナー室
ゲスト 中島那奈子(ダンス研究者、ダンス・ドラマトウルク)

2019年は、ドイツのヴァイマルに、デザイナーや建築家を育成する造形教育機関バウハウスが創設されて100年にあたります。バウハウスで目指されていたのは、たんなる形の創案や機能の実現だけではありません。そこでのさまざまな活動の根底に流れていたのは、来たるべき新しい時代にふさわしい「人間性」の希求でした。例えば、バウハウスの舞台工房を率いるマイスターのオスカー・シュレマーは、斬新なダンス作品をとおして、人間の身体の新たな位相を開こうとしていました。本企画では、ゲスト・スピーカーの中島那奈子氏とともに、ダンス研究の視点から、バウハウス以降の100年をとおして人間は人間自身の身体をいかにデザインしてきたのかを尋ねます。

コロキウム企画 & モデレーター：京都工芸繊維大学 三木順子

中島那奈子氏 プロフィール



ダンス研究者、ドラマトウルク、日本舞踊宗家藤間流師範名執藤間勘那恵。2007年よりドイツ学術交流会(DAAD)の支援を受けてベルリン自由大学で研究を行い、論文『踊りにおける老いの身体』で博士号取得。ベルリン自由大学国際研究センターフェローの後、愛知大学、尚美学園大学、京都造形芸術大学、ベルリン自由大学などで教鞭をとる。またドラマトウルクとして、“Exhausting Love at Danspace Project”(振付ルシアナ・アーギュラー、2006~07年NYベッシー賞受賞)「劇団ティクバ + 循環プロジェクト」(振付砂連尾理) “x/groove space”(振付セバスティアン・マティアス)、「イヴォンヌ・レイナーを巡るパフォーマンス・エクスビジョン」(京都芸術劇場春秋座)に関わる。編著に The Aging Body in Dance (Routledge, 2017)、共著に Dance Dramaturgy (Palgrave, 2015)、『スピリチュアリティと芸術・芸能』(ピングネットプレス、2016)。2017年北米ドラマトウルク協会エリオットヘイズ賞特別賞受賞。2月に編著となる『老いと踊り』を勁草書房から出版予定。

主催：日本フンボルト協会関西支部